
プロジェクト報告

暮らしの中の民族と音楽 —在日コリアン音楽家たちの活動と語りから—

猿 橋 順 子

1. 本研究プロジェクトの背景

筆者はかつて、「在日韓国・朝鮮人一世から二世への生活文化の形成および世代間継承の研究」¹⁾と題するグループ研究プロジェクトに参加した。この研究プロジェクトは、その成果をまとめた書籍の中で橋本が記しているように、神奈川県川崎市南部に暮らす
在日韓国・朝鮮人一世の生活史を主たる展示対象とするオンライン資料館「川崎在日コ
リアン生活文化資料館」²⁾を運営する市民活動に、2006年から橋本と猿橋が参加してい
たことをきっかけのひとつとしている（橋本ほか 2021, p.11）。

また、この研究プロジェクトの期間中、メンバーのひとりである高正子氏は、在日コ
リアン音楽家たちによる研究公演の企画にも携わっていた。そのため、グループの研究
活動で顔を合わせるたびに、私は高氏から研究公演を企画する意義や課題、準備の手順
や進捗状況を聞く機会に恵まれていた。

高たちが手がけた研究公演、「アリラン峠を超えていく：在日コリアン音楽の今」は、
国際伝統音楽学会(International Council for Traditional Music)の「音楽とマイノリティ
部会」国際シンポジウムのプログラムとして編成された（国立民族学博物館 2014）。朝
鮮半島北部の音楽を継承する在日コリアンとして金剛山歌劇団、南の音楽を継承する者
としてパンソリ唱者の安聖民（在日コリアン三世）、自らの経験や思いを歌詞に込めて
作詞作曲活動をするフォークシンガーの李政美（在日コリアン二世）が舞台に立った。

1) JSPS 科研基盤 (C) 26380727 (2014～2018年)。メンバーは橋本みゆき（研究代表者）、猿橋
順子、高正子、柳蓮淑の三名を研究分担者とする4人で取り組んだ。

2) 2006年開設。2019年からは川崎在日コリアン生活・文化・歴史研究会を新たに立ち上げ、「ま
なべる地域」として来訪者受け入れの体制を整えている。

音楽学者はもとより、文化人類学者、移民研究、マイノリティや先住民問題に関心を寄せる国内外の研究者に加え、一般の音楽愛好家も交えて国立民族学博物館講堂は満員となった。終演後も場内の拍手は鳴りやまず、みんなの研究公演としては異例だというアンコールに演者達がこたえた。

音楽家達の演奏と、それに呼応する聴衆の様子に手応えを感じた高と寺田は、終演後、ドキュメンタリー映画の制作に着手する。現役で活躍する在日コリアンの音楽家たち(主に二世と三世)にインタビューを行い、研究公演の映像と共に一本のフィルムにまとめた。映画のタイトルは、記録に残すことを重視する意味を込め、公演タイトルにあった「今」を取り「アリラン峠を越えていく：在日コリアンの音楽」³⁾としたとのことだった(高・寺田 2019)。

2019年3月の完成を前に、「青学で上映会を開催できないか」と高正子氏から打診を受けたのは2018年の末で、ちょうどグループ研究も期間満了を目前にした時期であった。そこで、2019年度に国際研究センタープロジェクトとして「移民の文化継承とその作品化過程に見えるもの」を発足させ、「表現のカタチ：うたう・かたる・つくる・つなぐ」と題する催しを企画した(p.7, 図1参照)。2019年11月19日に開催した催しは、映画の上映と、制作者と出演者を交えての座談会、朝鮮民謡とパンソリのミニコンサートで構成し、さまざまな分野の研究者と当該テーマに関心をもつ人びとが集まり、有意義な学びの時をもつことができた(猿橋 2021)。

2. ふたつの問いかけ

前節に示した一連の出来事のなかで、筆者に向けられたふたつの問いかけが、2022年度の研究プロジェクトに関連している。

ひとつは2014年のみんなくでの研究公演を鑑賞した後、懇親会に参加し、帰途についた時のことだった。私は、高正子氏から、この研究公演を実現するまでの奔走や葛藤を聞く機会があったため、公演が成功に終わったことを自分ごとのように嬉しく思い、あたたかな気持ちで会場を後にした。道すがら、台湾から来たという女性に話しかけられた。彼女は台湾原住民の音楽を研究している文化人類学者だと自己紹介をした上で、以下のように筆者に問いかけた。

3) 本作のフィルムレビューにおいてHoward (2021) は、演者の心情はよく表現されているものの、在日コリアンの置かれた歴史的な事情や、音楽活動の系譜と現状についての説明が限定的であることを指摘している。その上で、歴史的・政治的な背景説明をどこまで入れるべきかについて読者に問いかけている。この問いは次節で述べる筆者の問題意識にも通じる。

在日コリアンという存在が、日本の植民地支配によって生まれたマイノリティという歴史的な事情はよく分かります。でも、今日の音楽のうちの2つは、韓国は韓国の、北朝鮮は北朝鮮の真正（authentic）な音楽に私には聞こえました。歌い方も、衣装も、演目も、すべて本国で規範とされているものと見紛うものでした。今日の音楽のどこに在日コリアンならではの特徴が見出されるのかをずっと探しながら聞いていました。あなたは本国規範とは違う、マイノリティである「在日コリアンの音楽」としての特徴を、今日の演奏のどこに見出すのですか？

この質問に、私はすっかりたじろいでしまった。その場では、音楽学が専門ではないこと、金剛山歌劇団の演奏もパンソリも、生で聞くのは実は今日が初めてで、音楽をめぐって本国規範や真正性の何たるかを語る資質は私にはないのだと伝えた。彼女はそれ以上、この問いを掘り下げることせず、四方山話をして別れたが、質問をはぐらかしてしまったような気がして、いつまでも心にひっかかるのだった。

もうひとつは、2019年に本学で実施したドキュメンタリー映画上映会の後の懇親会の席上で、映画の制作者でもある寺田吉孝氏から問われた質問である。

「猿橋さんはなんで今回の上映会をやろうと思ったの？」

「高さんから頼まれた」という経緯もあったので、この問いかけには正直面喰らった。もちろん、プロジェクトとして申請している時点で、その目的や意義は精査した上で明示している。以下は、2019年度のプロジェクト申請書に記載した目的である。

本作品は、在日コリアンの音楽実践を記録したという意義だけではなく、朝鮮民主主義人民共和国の音楽、大韓民国で指導を受けた演者、在日コリアンとしての音楽を追究してきた演者という、対照的な立場にある三者の共演という点が特徴的である。また、研究公演を実現させただけでなく、それを映像作品としてまとめた高・寺田の試みは、蓄積の少ない在日韓国・朝鮮人の文化継承の記録としての価値に、クロスジャンルという価値を付与している点が注目される。（中略）上映会に先駆け、公演の企画者であり映像編集者である高正子氏にインタビューを実施し、広く移民にとって文化実践を表現する場を作り、記録することの意義、思いと課題について聞き、理解を深めることに取り組む。筆者が専門とする社会言語学的なテーマとの関連からは、文化継承に付随する言語文化接触、言語文化混淆、言語意識変容の観点に注目して考察を深めたいと考えている。

在日コリアン音楽家たちの演奏と、その背景のストーリーを盛り込んだドキュメンタ

リー映画に感銘をうけ、私が媒介者となって、より多くの人に知ってもらいたい、と思ったことは確かである。座談会でも、その思いや意義を語っていただいた（猿橋 2021）。しかし、それらをただまとめるだけでは研究者として不誠実ではないだろうか。寺田氏の問いかけは、私にそう迫っているような気がした。

これらのいきさつから、在日コリアンの暮らしの中の音楽について、社会言語学のアプローチを援用しながら、私ならではの研究課題とすることに、2020年から2022年にかけて三年間取り組んできた。

3. 2022年度の研究プロジェクトの概要

2022年度の研究プロジェクトでは、2つの取り組みを実施した。モバイル・メソッドを用いた経験的研究と、分析枠組みの理論的検討である。前者は、従前のグループ研究で実施した在日コリアン二世へのライフストーリー・インタビューの延長線上に調査計画を立てた。後者は、韓国伝統音楽特有のリズム形（長短、チャンダン）の語られ方⁴⁾と実践の現場から着想を得て、アンリ・ルフェーヴルのリズムアナリシスを、ことばと社会の相互作用の探究、ひいては言語政策研究に援用する可能性の検討を行った。

3.1 在日コリアン三世・民謡歌手の歩みを振り返る旅

以前（2015年）に行ったインタビューの中で、ある在日コリアン二世の男性（張宏明さん（仮名）、1951年生まれ）が、済州島出身の一世の父から「民族のリズム」を受け取り、民族的な音楽が、家庭生活だけでなく地域生活、職業生活において重要な位置を占めていると語った。彼の娘は、朝鮮民謡歌手として活動しており、そこに民族文化の世代間伝達が認められた。そこで、今回は宏明さんの娘（在日コリアン三世）を起点に調査に取り組んだ。

調査手法としてモバイル・エスノグラフィーを採用した。モバイル・エスノグラフィーは、現代社会の複雑かつ活発な移動性（mobilities）への注目から、方法論として体系化された手法である。移動性に注目することで、社会的ネットワークの構造と機能の探究、コミュニティ形成や社会的実践の過程への接近が試みられる（Blok 2010）。ここで

4) リズム、リズムパターン、拍子など、表現は人によって異なるが、文様を備える文化的リズムを指す意味で、本論では「リズム形」と表記する。振動や波紋のような進行型のリズムと区別して、山崎（2018）はベルクソンの「人は後続する音のなかに先行する音を聞く」という表現に示唆を得ながら、身体が記憶する文化的リズムの「完結性」を「音の意味的順序の逆転」を伴うと説明している（p.52）。

いう社会的ネットワークとは、人と人との関係性にとどまらず、人・テキスト・概念・コト・モノとの記号的関係性も含まれ、当然、物理的な場とインターネット空間の行き来も含まれる。人と概念、出来事、諸物の関係性を、場の動的な遷移も考慮しながら紐解くことで、社会生活のなかで認められるパワー関係を明らかにしたり、既存の（調査者が無自覚に保持しているものも含め）パワー関係に対する硬直的な視座を問い直したりすることが期待される。

張宏明さんの娘である張春子さん（仮名）は、日本各地と朝鮮民主主義人民共和国（主に平壤）を行き来しながら朝鮮民謡歌手として活動してきた。彼女を中心に、西日本のA県において、生まれ育った家、今の職業（民謡歌手）につながる経験をした思い出の場所、声楽部を創部し歌うことに明け暮れた朝鮮学校、応援してくれた日本人教員のご自宅等を案内していただいた。道すがら思い出される話を聞き、行く先々で出会う関係者からも話も聞いた。詳細は論説「朝鮮民謡をめぐる語りと意味づけ：在日コリアン民謡歌手への同行インタビューから」にまとめた（猿橋・橋本 forthcoming）。

3.2 リズムアナリシスの理論的な援用可能性の検討

リズムアナリシスは、複雑化・加速化・消費社会化されていく都市生活のありようと生き方を再考する実践型の方法論で、近年、社会学や文化人類学等の領域で再評価されている。それは、3.1で用いたモバイル・メソッドの発展とも軌を一にしている（Lee 2017；Lyon 2020）。

もちろん、韓国伝統音楽のリズム形をめぐる語りや実践と、フランスの思想家が20世紀末に提唱した実践理論が、即座に結びついたわけではない。着想に至った経緯を以下に簡潔に示しておく。

2019年に開催した会（p.7, 図1参照）で、活動中での葛藤や迷いがあるかという筆者からの質問に対して、パンソリの鼓手として出演していた李昌燮氏は「太鼓では、在日だからどうのっていうのはない」ときっぱりと答えた（猿橋 2021, p.6）。第二節で示したとおり、「在日コリアンであること」を研究課題の中心に据えていた筆者にとって、この発言は虚をつくものだった。張宏明さんのインタビューでも、「民族のリズム」が身体にあること、農楽隊に加わることは、在日コリアンとしての暮らしを支える上で重要な位置を占めると語られていたし、現在でもヘイトスピーチや差別への抗議として、伝統衣装に身を包み、チャンゴ（打楽器）を携えて毅然と立ち振る舞う人の姿を認めることがある。太鼓こそ、在日コリアンコミュニティを支えてきたシンボルのひとつとまで思い込んでいた筆者にとって、この発言は新鮮で、その意味内容に分け入っていく価値があるものと直観された。

そこから李昌燮氏へのインタビューに加え、舞踊家や歌手、他の楽器の奏者たちへのインタビューに取り組んだ。その中で、表現のしかたはさまざまであれ、韓国伝統音楽および朝鮮半島発祥の固有特有のリズム形を中軸に、実践や活動の語りが展開されることがたびたびあった。それらのリズム形は、祝祭や共同作業等、人びとの集まりで用いられる諸民族のリズムが、いにしえから今日まで等しくそうであったように、音が届く範疇を包み込み、即興的で開放的な共同体形成の機能を備える。

さて、ルフューヴルのリズムアナリシス (Rhythmanalysis)⁵⁾は、他のさまざまなリズム分析⁶⁾と区別される特長のひとつとして、生活の中にあるモノやコト、ヒトに備わる、さまざまな形と周波または周期とピッチをもつリズムを見定めることに取り組む⁷⁾。そうすることによって、揃わなければ実現できない諸物のセットを見極めたり、定期的に集約されるものとそうでないものを見分けることが可能になる。ひいては、諸物の結束点（目標）に向かって、備えや調整ができるようになる。日常生活の中にそうした視点を盛り込むことで、受動的／従属的ではなく、能動的で創造的な生活者となることを志向する⁸⁾。すなわち、リズムアナリシスは、知識を積み上げるタイプの学びではなく、生きることについての思想であり、実践を通して訓練され、身につけていくスキルでもある。

リズムアナリシスは、たとえば歩行やスポーツ、ニュース、市場、祭りなど、日常のどのような活動についてもあてはめて応用することができる。しかし、ある程度、リズムを言語化して備えもつ音楽は⁹⁾、リズムアナリシスの思想を把握する具体例として重要であるという (Lefebvre 1992=2004)。ただし、Lefebvre は、バッハやシューマンを具体例として論じつつも、舞台芸術化された音楽は、精緻に複雑化されており、場合に

5) rhythm と analysis は分かち書きせず、一語であることに注目されたい。

6) たとえば社会言語学領域では Van Leeuwen (2011) や Pennycook & Otsuji (2015) など。言語学や文学に範疇を広げれば、音声学、音韻論をはじめ詩とリズムの関連など、多くの蓄積がある。

7) リズムを「生の哲学」とする思想の主だったものとして、世阿彌、クラーゲス、ベルクソン、山崎などが挙げられるが、リズムの定義、リズムと拍子の弁別、その社会的な実用可能性などをめぐって立場と見解の相違がある。複雑化する都市生活への実践的応用、言語をめぐる諸課題との接合、論理のシンプルさという面において筆者はルフューヴルに注目している。

8) 発想としては、東洋の陰陽理論を参照する Personal leadership (PL ; Schaetti et al. 2008) にも重なる。相違点のひとつとして、PL は対人関係にのみ注目するのに対して、ルフューヴルのリズムアナリシス (Lefebvre 1974=1991) は、対人関係に加え、モノとモノ、モノと人、人と場との関係など、自然や空間との調和も範疇に含めている。

9) リズムや拍子に関する語彙や表現を豊富に蓄えているという意味ではそうだが、演奏は身体そのものが覚える行為であり、むしろ「意識の記憶力」にはたらしきかけることは、その邪魔になる場合があることも留意されたい (山崎 2018, p.55)。

青山学院大学国際研究センタープロジェクト

表現のカタチ

うたう かたる つくる つなぐ

ドキュメンタリー映画上映:
『アリラン神を連れていく〜在日コリアンの音楽』
出演者・制作者を交えた座談会 & ミニコンサート

参加費 無料
【事前申込中】

宋明花
ソンミンファ
朝鮮半島追放民謡歌手

青山学院アスタジオ B1F ホール

東京都渋谷区神宮前3-43-11
東京メトロ有明線新大塚駅より徒歩約5分
最寄り駅有明線・有明線
Found Map! (印刷版の地図)を右折
道順に示す。

安聖民
アンサンミン
パンソリ囃子

2019.11.16 Sat.
13時開演 13時30分開演 (17時30分終了予定)

図1 2019年度研究会 (2019.11.16)

言語政策研究
ミクロとマクロの
接続と連環

言語管理理論と
リズムアナリシス

第1部 (13:00-15:00)
ミクロとマクロの言語管理の
複層性を追跡
【言語管理の歴史と理論的展開】
研究発表者: ミチノ・ユキ (神戸大学)
【ユニバーサル・ミュージアムの言語管理】
研究発表者: 上村もも (山梨大学)
【言語管理におけるミクロとマクロの接続と
連環】

第2部 (15:30-17:30)
伝統文化伝承・実践の感境
にみる言語政策的諸相
【ゲストトーク】
広瀬浩二郎
【座談会】
【座談会】
【座談会】

2023年 3月11日(土)
13:00-17:30 (開演12:30)
青山学院大学 アスタジオ
地下1階ホール
【入場券】
【入場券】
【入場券】

主催: 青山学院大学国際研究センター
参加費: 無料
申し込み: 下記URLにて事前登録
https://bit.ly/3gkqkqk
お問い合わせ: 国際研究センター
international@yamanashi.ac.jp

図2 2022年度研究会 (2023.3.11)

よっては分かりにくさを印象づけてしまう可能性すらあると指摘する。シンプルかつ、循環するリズム形（文様）を備え、個々のパターンに名前がつけられ、トランスナショナルに広がる朝鮮半島発祥の長短は、西洋音楽が抱えるこうした限界も乗り越える具体例としての可能性を秘めているのではないかと思われる。ただし、そのようなプロジェクト（ルフェーヴルは実践するリズムアナリシスをプロジェクトと呼ぶ）は、こうした活動に意義を見出す集団による参加型の実践となることが求められるため¹⁰⁾、実行に移すのは難しいのも実情である。

そこで、まずは着想レベルではあるものの、2023年3月に開催した研究会「言語政策研究におけるミクロとマクロの接続と連環：言語管理理論とリズムアナリシス」（図2参照）において、「言語と社会のリズムアナリシス試論」と題する研究発表を行った¹¹⁾。抽象論に終始するのではなく、具体例を体感してもらうために、李昌燮氏に長短の基礎練習の実演と演奏をしていただいた¹²⁾。次節では、研究発表からリズムアナリシスの言

10) 実践共同体 (Lave & Wenger 1991) のような活動となることだろう。

11) 研究会の前半は、全盲の文化人類学者、広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館教授）の協力を得て、ユニバーサル・ミュージアムをめぐる言語管理についての研究発表が行われた。

12) リズム形の1単位と演奏作品の間にもミクロ・マクロ関係が見出しうる。世阿彌の「序破急」に通じる。

語政策（研究）への援用可能性について、あらゆるコミュニティ活動で用いられる意義があることを基底に置いて論じる。

4. リズムアナリシスの言語政策研究への援用可能性

言語政策研究において、ミクロレベルとマクロレベルの接続と連環は従前からの課題である。たとえば、マクロレベルの最たる例として、政府が策定する一方的なトップダウン型の言語政策では、社会が硬直的になるし、支配—被支配関係が再生産されがちになる。そもそも社会に浸透しない言語政策は論外であるが、浸透したとしても、それが人びとにとってより豊かな言語社会生活に寄与するものでなければ意味がない。

そうした要請にこたえようと生み出されたのが言語管理理論（Language Management Theory, LMT）である（Neustupný 1968）。言語管理理論は、話し言葉から書き言葉までを含め、言語・コミュニケーション上の問題発見から、調整を図るプロセスについての理論枠組みである。個人レベルの言語・コミュニケーション問題（ミクロ）から、国家や組織レベルの言語政策（マクロ）までの展開を研究課題とする。本論で注目するリズムアナリシスも、社会的出来事のプロセスに着目するという点と、日常の小さなモノ・コトの関係性（ミクロ）を、人の生き方やコミュニティのあり方を含めた都市計画（マクロ）に展開して考えるという2つの点において、言語管理理論との共通性が認められる。

他方で、言語政策におけるミクロとマクロと言った場合、複数の指定のしかたが混在しており、研究者間でも見解の相違がある（Kimura & Fairbrother 2020）。まず、ミクロとマクロの関係を二分法的なものとする見方（たとえば「個人と国家」と相対的なものとする見方（たとえば「行為と習慣・文化」とがある。また、仮に相対的なものと捉える立場を共有していたとしても、社会的現実のひとつの（たとえば言語面だけの）次元にとどまっていることはなく（むしろそのような状態は稀である）、異なる次元や領域への飛躍や相互参照が活発に行われている。そのことが専門家間の、あるいは研究者が実務家達と協働で何かを成し遂げようとする時の混乱や衝突（言語・コミュニケーション問題）として立ち現れる。

たとえば Silverstein (2016) は、ワインの生産と消費を事例に、言語の中にあるジャンルに固有の指標秩序（indexical order）を描き出すことに取り組んだ。ワイナリーなどの専門家集団は、その分野について、素人に対して用いるのとは別の、専門的な用語のセットをもっている。それらの表現の蓄積と選択幅に応じて、作業効率が変わるだけでなく、成員間の階層関係を形作る。もちろん階層は固定的なものではない。新参者

は専門家の言葉遣いや表現に少しずつ触れ、その分野における専門性を手技と表現の両面から培っていく。同時に、コミュニティ内での地位を獲得していく。こうした専門性とコミュニティ形成、言語・コミュニケーションの関係は、専門家集団だけではなく、ファンコミュニティや社会運動の集団・集合などにも等しく認められる。

問題は、私たちの社会的な活動は、特定の専門家集団だけで閉じられた世界を形作っているのではなく、現場はあらゆる社会規範（Silverstein の用語を用いるなら指標秩序）が入り乱れて成立しており、異なる専門性をもつ人たちが協働するような場面では、なおさら複雑な様相をなす。たとえば、楽器演奏の稽古場で、ジェンダー規範が持ち込まれたり、世代の規範が持ち込まれることはごく当たり前の日常であろう¹³⁾。専門家とはいえ、自分たちの業界内の指標秩序だけでコミュニケーションを成立させることは少なく、言語化する範疇の精度、緻密さについてもさまざまな次元を行き来する。つまり、実際のコミュニケーションは、次元の飛躍（scale jumping、ミクロ・マクロ間の飛躍と言い換えてもいいかもしれない）と、モード、メディア、ジャンル間の行き来が錯綜する場なのである（Carr & Lempert 2016）。

通常、このようなコミュニケーションのありようはカオス的で、それ自体が「アマチュアらしさ」を指標してしまうことにもなり、精鋭の専門家集団であるほど疎まれることにもなろう。しかしグローバル化が加速するなかで、さまざまな文化背景と専門性、関心度をもつ人が出会い、より民主的で開かれた社会活動を展開する上では、次元の飛躍やジャンル間を行き来しながら行われるコミュニケーションのありようを常態として捉え、それへの対応力と調整力、対話力を培うことが求められる。

リズムアナリシスの発想は、こうしたコミュニケーションを不確実性や曖昧さへの対応力を備えるといったことによってではなく、個々が意味と背景をもってその場に集まっているという見方に立つ。即興的な現場を、ばらばらで、ちぐはぐなモノやコトが寄せ集められているとみなすのではなく、摂理によって引き寄せられたモノとコト、ヒトで場が存立し、そこから新しい何かが生まれるとみなすのである。

…the act of rhythm analysis integrates these things – this wall, this table, these trees – in a dramatic becoming, in an ensemble full of meaning, transforming them no longer into diverse things, but into presences. (Lefebvre 1992=2004, p.23)

つまり、リズムアナリシスは、カオスや不確実性（と目される現象）に対する説明理

13) 本論 2 節で示した本国規範、言語の母語話者規範も同様である。

論という側面もある。そして、リズムの中の節目は、別個の軌跡を辿ってきたモノ・コト、ヒトの結びつきや調和についての結果を提示する枠として機能する¹⁴⁾。万物に備わるリズムを見極めれば見極めるほど、外せない大事な要素 (factors) と瞬間 (moment) を見定めることを助ける。あるいは調整可能なリズムと調整不可能なリズムを分け、両者へのアプローチの仕方を分けるということもできる。一見、関係がないように見える人と人、人とモノとの出会いを、かけがえのない縁として尊重しあう態度にもつながる。

では、なぜ、リズムアナリシスが言語政策研究に有効で、且つ社会活動の場に導入する価値があると言えるのか。これまで、言語学は、音声学・音韻論・統語論・意味論・語用論といったように、言語の諸相を切り分け、それぞれの専門性を領域内で高めてきた。他方で、大概、言語学事典類の末章に位置づけられることの多い言語政策研究は、言語全体を扱うばかりでなく、言語以外の要素を排除してはならないという命題を携えている (Cooper 1989)。それは、言語を検討しているときに、それ以外の要素が入り込んでくるのを除外しないという程度では済まず、言語とそれ以外のモノ・コトがどのように結びつき得るかを積極的に見ていく態度が求められる (猿橋 forthcoming)。一見、相互関係があるようには見えないヒト、モノ、コトの間にさえも、摂理・必然としての関係性と、そこから生まれる能動性と創造性に、よりよい都市生活者のありようを見出そうとするリズムアナリシスの思想と方法は、多言語話者からなる多文化共生社会のありようを考える上でも示唆的であると期待される。

5. 結論と今後の展望

本論では、2019年度から本年度の研究プロジェクトまでの経緯を振り返り、問題意識を確認した上で取り組んだ2つの研究活動について、概要と結果の一部を示した。

2つの研究活動は、一方が朝鮮民謡、他方が朝鮮半島発祥 (韓国伝統音楽) のリズム形 (長短) についてであった。ところで、朝鮮半島のみならず、世界に広がる朝鮮民族に共通する文化遺産は、民謡のアリランだといわれる (任東権 2003)。アリランは世界各地にあまたのバージョンを生み出し、歌い継がれて今日に至る (田月仙 2008)。それぞれの土地で、さまざまな思いを歌詞に込めて、さまざまな言語でアリランが歌い継がれてきた。それでもなお聞く者につながりが見出されうるのは、民謡というジャンルに「朝鮮民族の魂が宿っているからだ」と形容されることがよくあるが¹⁵⁾、それに加え、い

14) このような機能を考える段階では、リズムと拍子の区別がきわめて重要になる。

15) 一例として、金奉鉉 (1990) が挙げられる。

や、それ以上に、身体記憶として持続されるリズム形が継承されて埋め込まれてあるからではないだろうか。

韓国・朝鮮の文化を継承し、そのコミュニティ活動に触れ、関わる人びとをリズム形が抱擁する。李昌燮氏の言う「在日だからどうのっていうのはない」(猿橋 2021, p.6) は、在日コリアンコミュニティに限定されない(限定しえない)長短の包摂性を言い表しているとも取れる。リズム形は国籍、言語、国境を超えて、離散している人びとを結びつけ、開かれて、共同体を維持し、更新させていくことを助ける。

既に述べたとおり、筆者は芸能や音楽の真正性を吟味、検討する資質をもちあわせていない。そのような者が、このような推論を提示するのは、あまりにも乱暴なことであろう。しかし、言語の母語話者規範をめぐる議論に触れてきた社会言語学者として、筆者は、中央集権的なパワー関係を生みだしやすい本国規範イデオロギーを警戒する立場に立っている。以下のような結論に至ったのには、そうした自身のポジショナリティも手伝っているだろう。

朝鮮半島発祥のリズム形は、本国規範を遵守する韓国伝統音楽も、世界各地に広がるコリアンコミュニティで継承されてきた音楽も、そしてそれらの音楽に触れ、感化される人びとをも、あまねくつなぎあわせる機能を、今も昔も担っている。

冒頭で示した問い、「在日コリアンならではの音楽のありか」については、そのような道を意識的に歩んでいる人もいるが、そうではない人もいる、という結論となろう。いずれの道を進むかは、音楽ジャンルや楽器の種類、役割、個人の信条にもよる。ただし、決してこじつけをしてはならないが、音楽家として歩んできた道のりの語りには、在日コリアンであることがつきまとっているのも実際であった(猿橋 2022)。それに、好むと好まざるとに拘わらず、いずれかの視点を携える他者のまなざしや関わりから、人は自由ではいられない。

さて、高正子氏は、2023年4月29日に開館した「大阪コリアタウン歴史資料館」の館長として、日々、来館者を迎えている。橋本みゆき氏は、冒頭で示した川崎在日コリアン生活・文化・歴史研究会で活躍している。その拠点でもある川崎市ふれあい館に集う在日コリアン一世の日常を描いた映画『アリラン・ラブソディ』(金聖雄 2023)は、2024年から全国劇場公開され、支持者の裾野をしっかりと広げている。

ルフェーヴルはリズムアナリシスについて、理論的検討や概念化も大事ではあるものの、個々の経験に照らして、実践に移されてこそ、その真価が発揮されると説いている(Lefebvre 2004, p.70)。言語とコミュニケーションをめぐる問題への対処、コミュニ

ティ・レベルの言語政策の調整は、どのような領域にも求められる。私も、在日韓国・朝鮮人をはじめ、在日外国人がいきいきと取り組む文化活動の現場で、実践と学びの共同体形成に貢献できるよう、その準備を柔軟に、かつ着実に進めていきたいと思う。

謝辞

調査にご協力くださいました張春子さん（仮名）、研究会にて、心弾み、息を呑むチャング演奏をしてくださった李昌燮さん。ありがとうございました。また、いつも変わらず親身に助言をくださる高正子さん、橋本みゆきさんにも心から御礼申し上げます。

問題提起をくださった故寺田吉孝先生（民族音楽学者、国立民族学博物館名誉教授、2023年3月29日ご逝去）に謹んで哀悼の意を捧げます。

本研究は、青山学院大学国際政治経済学部附置国際研究センターおよびJSPS 科研、基盤（C）「多言語実践共同体の相互作用秩序の交渉と変容（21K00531）」の助成を受けています。

参考文献

- Blok, A. (2010). Mapping the Super-Whale: Towards a mobile ethnography of situated globalities, *Mobilities*, 5(4): 507-528, DOI: 10.1080/17450101.2010.510335
- Carr, E. S., & Lempert, M. (eds.) (2016). *Scale: Discourse and Dimensions of Social Life*. University of California Press.
- Cooper, R. L. (1989). *Language Planning and Social Change*. Cambridge University Press.
- Howard, K. (2021). Film review: Crossing over the Arirang Pass: *Zainichi* Korean music, *Ethnomusicology Forum*, DOI: 10.1080/17411912.2021.1994440
- Kimura, G. C., & Fairbrother, L. (eds.) (2020). *A Language Management Approach to Language Problems: Integrating Macro and Micro Dimensions*. John Benjamins
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press. (レイヴ, J.・ウェンガー, E. (著)佐伯胖(訳) (1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書)
- Lee, S. P. (2017). Ethnography in absentia: Applying Lefebvre's rhythmanalysis in impossible-to-research spaces. *Ethnography*, 18(2):257-276. DOI: 10.1177/1466138116641438
- Lefebvre, H. (1991). *The Production of Space* (D. Nicholson-Smith, trans.). Basil Blackwell Ltd. (Original work published 1974).
- Lefebvre, H. (2004). *Rhythmanalysis: Space, Time and Everyday Life* (S. Elden & G. Moore Trans.) Continuum. (Original work published 1992)
- Lyon, D. (2020). *Rhythmanalysis: Research Methods*. Bloomsbury.
- Neustupný, J. V. (1968). Some general aspects of "language" problems and "language" policy in developing societies. In J. A. Fishman, C. A. Ferguson, J. das Gupta (eds.), *Language Problems of Developing Nations*. (pp. 285-294) John Wiley & Sons,
- Pennycook, A. & Otsuji, E. (2015). *Metrolingualism: Language in the City*. Routledge.
- Schaetti, B. F., Ramsey, S. J., & Watanabe, G. C. (2008). *Making a World of Difference: Personal Leadership: A Methodology of Two Principals and Six Practices*. FlyingKite,
- Silverstein, M. (2016). Semiotic vinification and the scaling of taste. In E. Summerson Carr & M. Lempert (ed.), *Scale: Discourse and Dimensions of Social Life*. (pp.185-222). University of California Press.
- Van Leeuwen, T. (2011). Rhythm and multimodal semiotics. S. Dreyfus, S. Hood & M Stenglin

(eds.). *Semiotic Margins: Meaning in Multimodalities*. Continuum.

- 任東權 (2003). 『韓日民俗文化の比較研究』 岩田書院
- 金奉鉉 (1990). 『朝鮮民謡史：庶民の心の唄』 国書刊行会
- クラークス, L. (著)、杉浦實 (訳) (1971=2006). 『リズムの本質』 みすず書房 (Original work published 1923)
- 猿橋順子 (2021). 「在日コリアン音楽家の文化実践に見る「表現のカタチ」」 *Aoyama Journal of International Studies*, 8, 1-14, <https://doi.org/10.34321/21705>
- 猿橋順子 (2022). 「韓国伝統芸能従事者のライフヒストリー：演者としてのアイデンティティに注目して」 *Aoyama Journal of International Studies*, 9, 1-13, <https://doi.org/10.34321/22112>
- 猿橋順子 (forthcoming). 「コミュニティ・レベルの言語政策」 村岡英裕・上村圭介 (編著) 『言語政策研究への案内』 くろしお出版
- 猿橋順子・橋本みゆき (forthcoming). 「朝鮮民謡をめぐる語りと意味づけ：在日コリアン民謡歌手への同行インタビューから」 『青山国際政経論集』 112
- 世阿彌 (著)、野上豊一郎・西尾実 (編) (1958). 『風姿花伝』 岩波書店
- 田月仙 (2008). 『禁じられた歌：朝鮮半島音楽百年史』 中央公論新社
- 橋本みゆき (編著)、猿橋順子・高正子・柳蓮淑 (2021). 『二世に聴く在日コリアンの生活文化：「継承」の語り』 社会評論社
- 山崎正和 (2018). 『リズムの哲学ノート』 中央公論新社
- ルフェーヴル, H. (著)、森本和夫 (訳) (2011). 『都市への権利』 筑摩書房 (Original work published 1968)

映像

- 金聖雄 (監督) (2023). 『アラン・ラブソディ』 (映画) Kimoon Film
- 高正子・寺田吉孝 (監修) (2019) 『アラン峠を越えていく：在日コリアンの音楽』 (映画) 国立民族学博物館

URL

- 大阪コリアタウン歴史資料館 <https://oktmuseum.or.jp/>
- 川崎在日コリアン生活文化資料館 <http://www.halmoni-haraboji.net/>
- 川崎在日コリアン生活・文化・歴史研究会 <http://www.halmoni-haraboji.net/lifelog/>
- 国立民族学博物館 (2014年7月20日) 「アラン峠を越えていく：在日コリアン音楽の今」 <https://older.minpaku.ac.jp/museum/event/slp/140720>